

本学の東日本大震災復興支援活動に関する一考察

——体験を「学び」に転換する——

森 河 亮

(受付 2015年 9月30日)

要 約

2011年3月11日に東日本大震災が発生した。本学においても、他大学と同様に大学の事業として2012年に被災地へ学生ボランティアを派遣することとなった。大学の事業として学生を派遣するため、被災地でのボランティア体験を学生の学びにつなげる事業として成立させる必要があり、独自にプログラムの構成や流れなどを工夫した。そのプログラムの効果を学生の学びの観点から検証した結果、本プログラムの構成および内容は、参加学生に復興支援ボランティア活動を通じて学びを提供するのに有用なものであったことが示唆された。その際、プログラムの構成を考慮するうえでは、体験学習サイクルの手法を参考に、活動前の「目標設定」を含む事前研修会および「実社会へ応用」することを意識した事後のふりかえりを行うことが、有用であることが示唆された。

1. 緒 言

2011年3月11日に東日本大震災が発生した。震災直後は警察や自衛隊などの公的機関による専門的な人命救助活動や復旧活動を行うことが最優先とされ、ボランティアによる活動は自粛ムードがあった。しかし、発災後しばらくして各被災地で災害ボランティアセンターが設置されたことにより、各種市民団体や全国各地からボランティアが派遣された。そのボランティアを派遣する機関として、大学もその一端を担った。このことにより、学生が災害ボランティア活動を経験する場が広く提供されることになった。

本学においても、発災直後から被災地でボランティア活動を行いたいという意志を有する学生が一定数存在した。しかし、その当時の本学は、被災地の状況や学生が携わるボランティア活動の内容などに関する正確な情報を得られない状況であり、また、ボランティア活動を行った学生の事後指導やメンタルヘルスケア（発災直後の被災地では衝撃的な風景や場面を目にする恐れが十分にあり、それで心に傷を負う可能性がある）などの体制が整っておらず、被災地でのボランティア活動を希望する学生には自粛するよう促していた。それでも行動力のある学生は、春季休暇や夏期休暇などに個人的に、または広島市や広島県の社会福祉協議会などが主催する事業を利用して被災地へ赴き、現地でのボランティア活動に従事していたようである。このような本学学生は、2011年度で述べ50名近くに及んだ。学生個人の責任ではあるが、大学としての支援は、ほぼ何もできていなかった。

2011年5月に東北学院大学が中心となり設立された大学間連携災害ボランティアネット

ワーク（東日本大震災への復興支援へ取り組むと共に、天災が多く発生する日本において本ネットワーク加盟大学が連携し、それぞれの災害への復興支援に取り組むことを目的として結成）に、本学は2012年2月に加盟し、2012年度の夏期休暇中に同ネットワークが主催する被災地でのボランティアプログラムに参加する機会を得た。このプログラムには、学生個人の責任で参加するのではなく、本学の事業として大型バスを仕立てて学生を派遣することが決まった。大学の事業として学生を派遣するとなると、被災地の復興を支援することだけではなく、当然、このプログラムでの経験が学生の学びにつながる事業として成立させる必要がある。そのため、同ネットワークから提供されたプログラムに関して、学生の学びの観点から考慮して、本学で独自にプログラムの構成や流れなどを工夫した。

そこで本報告では、本プログラムに関する効果を学生の学びの観点から検証することを目的とした。

2. プログラムの概要

2.1 参加学生

2012年6月に本プログラムに関する説明会を行い、41名の学生が参加した。その後、7月の締め切りまでに25名の学生が応募し、実際に男子学生14名、女子学生10名の計24名の学生が本プログラムに参加した。引率教職員3名も同行した。

2.2 事前研修会

被災地での体験を学生の学びとして転換するために、実体験から学びを抽出する手法の一つである体験学習サイクル⁵⁾を参考にし、その要素を取り入れた。体験学習サイクルは、図1に示すように大きく分けて4つの段階で構成されている。まず「体験する」。何らかの実体験や疑似体験をする。次に「その体験をふりかえる」。どんな体験をしたのか、そこでどんなことが起きたのか、その体験を通じて何を感じたのか、などをふりかえる。そこから「体験の意味を考える」。そこにどんな意味があったのか、それは良い事または悪い事なのか、どうしてそう感じたのか、などを考える。そしてそれを「次の行動に反映させる」。ではどうするのか、を考える。体験した事やその意味を実際に行動に移せる何かに収束する。体験活動期間中であれば次の体験活動へ、体験活動後は実際の生活場面に活かしていく。このサイクルを繰り返し行うことによって、体験からの学びを次の体験に活かし、そして実生活の場面で使える学びを自ら見つけ出していく。そして、体験から学ぶ際には「目標設定」が重要となる。「目標」は体験をふりかえる際のきっかけになり、同時にどうすれば目標を達成できるかの指針にもなる。

これらのことから、8月8日に事前研修会を行い、本プログラムにおける自身の目標を設定し、参加目的の明確化を図った。また、参加学生の中には被災地でのボランティア活

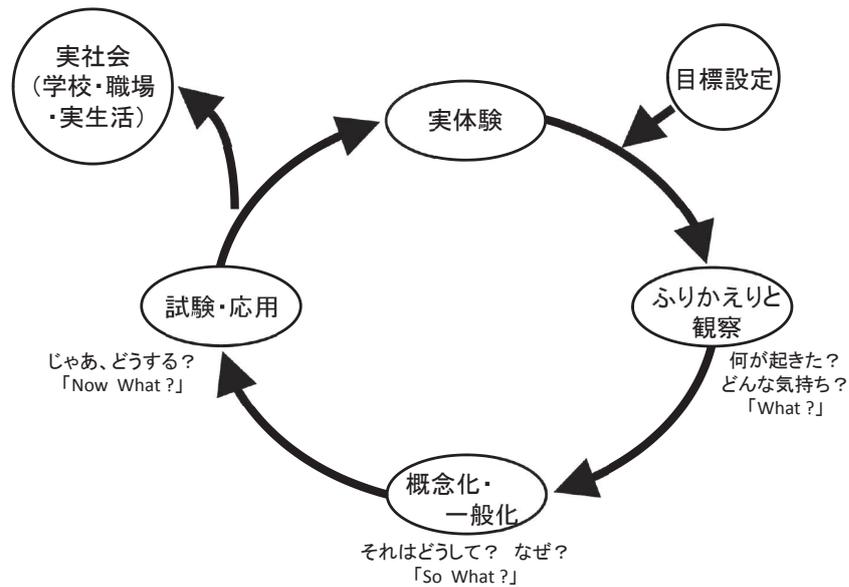


図1 体験学習サイクル

動を行ったことがある学生は少なく、中には本プログラムで初めてボランティア活動そのものを行うことになる学生も複数名存在していたため、広島県社会福祉協議会より講師を招き、被災地でのボランティア活動特有の留意事項などについて講演を行った。

2.3 ボランティアプログラムの内容

本プログラムは、2012年8月27日から9月2日の7日間で行われた。その内容を表1に示した。従事したボランティア活動は、仙台市若林区の農地復興作業が主であった。それに加え、若林区の慰霊碑参拝、農地復興ボランティア受け入れ団体先である ReRoots との合同ミーティング、他地域の被災の現状を知るための石巻市の視察、仙台市宮城野区福田町の福田南公園仮設住宅への訪問を行い、多角的に東日本大震災を知る機会を与え、より学びが深まるように考慮した。ReRoots は、地元の大学生が運営の中心を担っている団体であり、合同ミーティングでは代表の方に加えてその大学生4名も参加した。また、前述した体験学習サイクルを意識して、仙台での最終日の夜には全体でのふりかえりとお互いの意見・考えの分かち合いを行った。

2.4 事後研修会

被災地では非常に刺激の強い風景や場面を見たり、非日常的なボランティア作業を行ったりするため、広島での生活との違いに戸惑いを感じる事が予想される。中には、ボランティア活動中に出会った被災者の不自由な暮らしとは異なり、広島に帰った自分は何不自由ない暮らしができることに対して罪悪感を抱き、心身の不調を訴えることもないとは限らない。そのため、参加者の心身の様子を確認することを目的に、また、普段の広島で

表1 東日本大震災復興支援プログラムの内容

日程	時間	内 容
2012年8月27日	12:00 12:30 13:00	本学7号館集合 出発式 本学出発
8月28日	9:00 11:30 12:00 13:00 15:00 16:00 17:00 ～ 22:00	東北学院大学到着 チェックイン後 休憩・着替え買い出しなど 東北学院大学出発 活動受け入れ団体 ReRoots のボランティアハウス到着 オリエンテーション, 活動概要についての説明 農地復興支援プログラム 活動終了 若林区慰霊碑参拝 東北学院大学到着 ～ 入浴・夕食・休憩 就寝
8月29日	7:50 8:00 8:30 9:00 12:00 13:00 15:00 16:00 17:00 ～ 19:30 22:30	東北学院大学 正面玄関集合 東北学院大学出発 活動受け入れ団体 ReRoots のボランティアハウス到着 オリエンテーション, 活動概要についての説明 移動後, 農地復興支援プログラム 昼食・休憩 農地復興支援プログラム 活動終了 ボランティアハウスにて解散 東北学院大学到着 ～ 入浴・夕食・休憩 ReRoots との「合同ミーティング」 就寝
8月30日	7:50 8:00 8:30 9:00 12:00 12:30 14:00 20:00 ～ 22:00	東北学院大学 正面玄関集合 東北学院大学出発 活動受け入れ団体 ReRoots のボランティアハウス到着 オリエンテーション, 活動概要についての説明 移動後, 農地復興支援プログラム 昼食・休憩 ボランティアハウにて解散 石巻市視察 東北学院大学到着 ～ 入浴・夕食・休憩 就寝
8月31日	7:50 8:00 8:30 9:00 12:00 13:00 15:00 16:00 17:00 ～ 20:00 22:00	東北学院大学 正面玄関集合 東北学院大学出発 活動受け入れ団体 ReRoots のボランティアハウス到着 オリエンテーション, 活動概要についての説明 移動後, 農地復興支援プログラム 昼食・休憩 農地復興支援プログラム 活動終了 ボランティアハウスにて解散 東北学院大学到着 ～ 入浴・夕食・休憩 全体でのふりかえり会 就寝
9月1日	8:00 9:00 9:30 12:00 14:00 ～	宿舎清掃 東北学院大学出発 宮城野区福田町南公園仮設住宅集会所到着 1. 住民の方から震災そして今についてお話を伺う 2. グループ別行動 ①編み物: 編み会の方と編み物を作りながら交流 ②見守り: 岡田児童館でけん玉等を行い児童と交流 交流をしながら昼食 宮城野区福田町南公園仮設住宅集会所出発 ～ 広島へ
9月2日	7:00	本学到着 解散

の生活を一定期間過ごしたが故に気付く・考えることをもとにふりかえりを行うため、9月11日に大学で参加者全体でのふりかえり会を行った。幸い、心身の不調を訴える参加者はいなかった。

2.5 アンケート

参加学生は8月8日の事前研修会で、本プログラムでの不安や生活上の心配事・本プログラムに参加する意義・本プログラムの経験を今後どのように役立て活用したいか、などを問う自由記述形式の事前アンケートへの記述を求められた。また、9月2日のプログラム終了時に現地での生活面やボランティア活動において大切なことや苦勞したこと、本プログラムのボランティア活動で学んだことや気づいたこと、本プログラムの経験を今後どのように役立て活用したいか、などを問う自由記述形式の事後アンケートを渡され、9月11日の事後研修会までに記述し、提出することが求められた。

3. 結果および考察

本プログラムは、参加学生の被災地でのボランティア体験を学びに転換するために、連携先である東北学院大学から提示されたプログラム内容に、体験学習サイクルの手法を参考に本学が独自に手を加えてプログラムを構成した。具体的には、事前研修会、若林区慰霊碑参拝、石巻市の視察、ReRoots との合同ミーティング、全体でのふりかえり会、宮城野区福田南公園仮設住宅訪問、事後研修会を加えた。これらを加えた本プログラムが、学生の学びにどのような影響を与えたのかを、事前アンケートおよび事後アンケートの内容から考察することとした。

3.1 現地復興支援ボランティア活動を通して学んだことについて

9月2日のプログラム終了から9月11日の事後研修会までに記述を求めた事後アンケートの項目「今回のボランティア活動で学んだことや気づいたこと」の自由記述の内容をKJ法を用いて整理した。その際、一人の学生が複数の内容を記入している項目は、それぞれ別の内容として1件数とした。その結果、「生き方や人生観・価値観」「自分自身の無知」「コミュニケーション・対人関係」「発信」「被災地以外での復興支援活動」「地元意識の向上」の6つにカテゴリー化した。

3.1.1 「生き方や人生観・価値観」について

「当たり前が当たり前ではない」「日々を感謝すること」「謙虚に生きること」「真摯に活動することの重要性」「人は一人では生きていけない」など、生き方や人生観・価値観に関する記述が参加学生のほぼ全員のアンケート内容から確認できた。阿部らは、2013年8月

に被災地の仮設住宅での支援活動に従事した大学生31名を対象に自由記述のアンケート調査を行い、その調査から「津波の跡や仮設住宅での生活に衝撃を受けた」学生や「自分本位ではなく、相手を思いやることが大切だと思う」と感じた学生の存在を確認している¹⁾。この結果は、被災地での支援活動中に非日常的な風景や被災者の方々を目の当たりし、そこから自分の置かれている状況がいかにか恵まれているかを再認識したからこそその結果であろう。この報告と同様に、本プログラムでも津波に飲み込まれて何もなくなった農地で復興支援活動を行ったり、津波による被害の大きな爪痕が残る石巻市の沿岸地を視察したり、仮設住宅の住民の方々の話を聞いたり、などの活動を行った。そのため、本プログラムの参加学生も非日常的な事象に触れることで広島での自身の日常がいかにか恵まれているかを再認識し、生き方や人生観・価値観に影響を及ぼされたものと考えられる。

3.1.2 「自分自身の無知」について

「自分はいかに広島について、農業について知らないかを知った」「テレビ越しで知ったような気がしていたが、実際に見た光景は想像以上に強烈で、何も知らなかったんだと思った」「自分は震災のことについて何も知らないことを痛感した」「被災した人の気持ちや体験した恐怖は分かった気になれても、本当の意味では分かれぬ」など、自分自身の無知に関する記述が確認できた。渡辺らは、2011年8月に被災地でのがれき撤去作業や水産加工場の復旧作業や側溝の清掃作業に従事した大学生93名を対象にアンケート調査を行い、その調査から報道などで目にする映像より、現地で実際に自分の目で見えた惨状や積み上がったゴミなどが非常に強い印象を学生に与えること、被災地の生活やそこで懸命に生きている人々からも強い印象を受けることを報告している⁶⁾。また阿部らは、実際のボランティア活動を通して「被災地や被災者の情報を事前に収集すること」や「もう少し地域の情報を得ておくこと」を自身の課題として学生がとらえることを報告している¹⁾。本プログラムにおいても、事前研修会で被災地の様子を伝え、従事する活動内容や被災者と関わる上での留意事項などについて説明を行い、参加学生の心と体についてはある程度事前の準備ができた状態であったと思われる。しかし実際の活動地では、津波の高さの跡が残る家屋や基礎だけしか残らなかった家屋、廃校になった小学校、従事した農作業の大変さ、仮設住宅にお住まいの方々の体験談など、かなり強い印象を与える事象に遭遇した。これらのことから、メディアを通じたものではなく、実際の現地で見ると聞く・触れるものが強く参加学生に印象を与え、それらについて何も知らなかった自分に気づき、自身の無知の認識に影響を与えたと考えられる。

門脇らは、被災地の学習支援のボランティア活動に従事した大学生を対象にアンケート調査を行った結果、同じ大学の学生同士の交流にとどまらず、他大学の学生との交流は視野が拡大する機会となっていることを報告している⁴⁾。本プログラムでは、活動期間中に我々が行うボランティア活動の受け入れ団体である ReRoots との合同ミーティングを行い、

そこには ReRoots の運営に携わっている仙台の大学生らが出席し、その学生らと意見交換を行った。このことも、参加学生の視野を広げ、自身の無知に気づく一助になったと思われる。

3.1.3 「コミュニケーション・対人関係」について

「被災者の方と同じ視線で意見を交わすことが大事」「相手の目線に立つということはかなり高度」「色々な感じ方・考え方を知ることができ、世界観が広がった」「相手のことを思いながらお話を聞くことが大切」「聞き出すのではなく、相手に寄り添うことの重要性を知った」「人と人とのつながりの重要性」「つながり、コミュニケーションの大切さを学んだ」など、つながりやコミュニケーションを含む対人関係に関する記述が確認できた。これには、本プログラムの内容が関係していると思われる。東日本大震災ではないが、2004年に発生した中越地震復興支援ボランティアに従事した大学生を調査した林らは、被災者間だけではなく被災者とボランティアとの間にも会話が生まれ、お互いの関係性が良くなることで人と人とのつながりの強さや素晴らしさを参加学生は強く感じた、と報告している²⁾。また、東日本大震災でのがれき撤去などではなく、被災者と密に接することが求められる仮設住宅での支援活動に従事した大学生を対象に調査した阿部らは、参加学生がボランティア活動で大変だと感じた項目には、「被災者との関わり方がわからず戸惑いがあったこと」と「話す内容で被災者を傷つけないか不安があったこと」が最も多かった、と報告している¹⁾。さらに、飯らは、2012年1月に現地での災害ボランティア体験を含む「東日本大震災復興論」の授業を履修した学生のうち59名を対象にアンケート調査を行い、被災者と交流する機会が少ない災害ボランティアは、被災者の思いへの共感が低くなることを示唆している³⁾。本プログラムでは、仮設住宅の住民の方々と交流する活動が含まれていた。また、ReRoots との合同ミーティングでは、自身も被災者でありながら支援団体の代表をされている広瀬氏や運営に携わっている仙台の大学生らと交流を行った。他にも、農地復興支援活動中にその農地の持ち主の方から震災当日の話を聴くことがあったり、差し入れを頂いたりすることがあり、多くの現地の方々と交流の場を持つことができた。これらことから、震災支援活動中の被災地の方々との交流が、参加学生のコミュニケーションや対人関係の意識に影響を与えたと考えられる。

3.1.4 「発信」について

「自分の意見や考えをしっかりと持って発言したり、伝えることの難しさを毎日のように感じた」「主観が入ってしまったり、語弊を生む恐れがあるため、広島で事実を伝えることが思った以上に責任がある」など、発信に関する記述が確認できた。これには、本プログラムの内容と本学の場所、そして実施時期が関係していると思われる。本プログラムでは、ReRoots との合同ミーティングと仮設住宅の地域住民の方々との交流を行った。その両方

で、接した方々から「見たことや聴いたこと、自身が感じたことを広島で伝えて欲しい」旨の言葉をいただいた。本学は被災地から距離的に離れており、頻繁に現地を訪れることは難しい。そのため、広島からでもできる支援活動を模索したとき、3.2.3で後述するように「広島での情報発信・風化防止活動」を考える学生が多く存在した可能性がある。広島と同様に、被災地から離れた福岡に住む震災支援ボランティアに従事した学生を対象に調査した渡辺らの報告⁶⁾では、活動後の情報発信に関する記述は確認できていない。これは、調査時期が2011年8月であることが影響していると思われる。この時期は、まだメディアで被災地の状況を伝える頻度も高く、全国で震災に関する風化は生じていない時期であった。しかし、本プログラムが実施された時期は2012年8月～9月であり、広島では1週間に数回被災地のことがテレビで放映される程度であった。これらのことから、プログラムの内容や体験した活動・事象、実施時期、地理的要因などが、参加学生の考えや感じることに影響を与えたと考えられる。

3.1.5 「被災地以外での復興支援活動」について

「広島で自分の足元を見れば、意外とできることはある」「現地に行って復興支援活動することも大切だけど、それだけが復興支援ではない」「東日本大震災や被災者の方々にについて考えることが、一人一人ができることの第一歩」など、被災地での活動以外の復興支援活動に関する記述が確認できた。これには、前述したような広島という地の被災地からの距離や接した方々からの言葉が影響していると思われる。また特に、仮設住宅の住民の方の「忘れないで欲しい。忘れられるのが一番悲しい」という旨の言葉が強く影響を与えたとと思われる。これらのことから、被災地からの距離や交流した方々からの言葉が、参加学生の復興支援の意識に影響を与えたと考えられる。

3.1.6 「地元意識の向上」について

「地元の大切さ。地元の問題点に目を向ける。自分たちの住んでいる所の問題をしっかりと見つけ、考えることで被災地のことも考えることができる」「自分たちの地域を見ることで必ず東北とつながることが出てくる」「地域住民と行政の対応との食い違い、対応の難しさ、これと同様のことが広島でも、自分の地元でも起こっている」など、被災地での気づきを自身の地元に変換させることに関する記述が確認できた。これと同様に、被災地に行くことで地元地域への意識が向上することを認める報告がある。飯らは、現地での災害ボランティア体験を含む「東日本大震災復興論」の授業によって、「地域への貢献について考えるようになった」学生が88.3%、「地元に対する愛着が増えた」学生が69.5%、「地域の行事に関心を持つようになった」学生が62.7%にのぼり、これには災害ボランティアに従事して被災地に触れること、また震災に関する知識を得ることが影響を与えることを示唆している³⁾。本プログラムにおいても、被災地で災害ボランティア活動に従事しており、ま

た ReRoots との合同ミーティングでは復興に関する地域住民と市や国などの行政との意見が異なり合意形成が得られにくいこと、田と畑では行政的な取り扱いが異なることなどのレクチャーを受けた。そして何より、本学の学生が ReRoots 代表の広瀬氏に「東北のために私たちにしたいことはなんですか」の質問をした際に、「東北のことは東北の人たちでしか本質的には解決できない。だから広島の場合は広島の人たちで解決して欲しい。みなさんがこのボランティア活動の経験を活かして、広島の課題に取り組み広島のことをより良くしてくれることを望みます」という旨の返答をされた。このことが参加学生には非常に強い印象を与えたようであった。これらのようなことが影響し、参加学生の地元への意識が高まったと考えられる。これは、後述する今後の活用法についても同様のことが伺える。

3.2 今後の活用法について

事前アンケートおよび事後アンケートに、「今回のボランティア活動の経験を、今後どのように役立てたい・活用したいと考えていますか」という質問項目を設けた。事前アンケートでは、一人平均1.5個の活用法の記載が確認された。内容としては「被災地とのつながりを大切にしたい活動をした」といなど、抽象的な回答が多く見られた。しかし、事後アンケートでは一人平均2.5個の回答があり、その内容も「広島、地元について調査する」「風化させないために色々な場所で展示、募金、バザーなどの活動を継続する」など具体的な回答が多く見られた。これは、実際に被災地に行き、活動し、自身で見聞きし、体験したからこその変化であろう。その事後アンケートの記述内容を KJ 法を用いて整理した。その際、一人の学生が複数の内容を記入している項目は、それぞれ別の内容として1件数とした。その結果、「自身の勉学への転換」「広島や地元地域への還元」「伝達・発信」の3つにカテゴリー化した。

3.2.1 「自身の勉学への転換」について

「この度知り得た視点で、農政や行政の動きに注目したり、今後の国際政治の勉強にいかしていきたい」「知らないことが多すぎるので、知ってほしい」「震災について、広島について調査する」など、本プログラムでの体験や知見を自身の勉学や学習へ転換させる旨の記述が確認された。このような回答をした学生の多くは、国際関係や地域行政に関する学習を主専攻として学んでいる学生であった。中越地震復興支援ボランティアに従事した看護学生を調査した林らは、参加学生の中でボランティア活動での経験を自身が学習している医療・看護の学習と結びつけることができた学生の存在を認め、災害医療・災害看護・児童看護・地域看護への興味が高まることを示唆している²⁾。これらのことから、大学での学習内容と関連の深い復興支援プログラムを構成することは、ボランティア活動従事後の大学での学生の学びに好影響を与える可能性があると考えられる。

3.2.2 「広島や地元地域への還元」について

「広島や地元を見つめて問題点を探し、役立てたい」「地元のことを見直す。今回学んだことを地元へ還元する」「広島での防災、減災の意識向上」「広島の抱えている問題を知っていききたい」「自分が住んでいる地域でのボランティア活動を行い、人との交流経験を増やし、その人たちに被災地の現状を伝えていく」など、広島や地元地域への還元に関する記述が確認できた。これには、3.1.6で前述した飯ら³⁾の報告と同様の傾向があること、そしてReRootsとの合同ミーティングでの広瀬氏からの言葉が大いに影響を与えていると考えられる。

3.2.3 「伝達・発信」について

「風化させないために、色々な場所で展示、募金、バザーなどの活動を継続する」「何があったのかを忘れずに次の世代や周りに伝える」「家族や友人など多くの人に伝える」「東北の現状を伝え、東北に本気でボランティアに行きたいと考える人を増やす」「教員になって、子どもたちに今回の体験で感じたことを伝えたい」など、伝達・発信に関する記述が確認できた。被災地から離れた広島では、距離の問題があり何度も被災地に足を運びボランティア活動に従事することは難しい。そのため、広島で継続的に具体的な行動を起こそうと考えた場合、情報発信や風化防止の活動が主になると考えられる。また、3.1.4で前述した本プログラムの実施時期やプログラム中に交流させていただいた方々からの言葉も影響を与えていると考えられる。

3.3 本プログラムの構成について

本プログラムは、参加学生の被災地でのボランティア経験を学びに転換するために、連携先である東北学院大学から提示されたプログラム内容に、体験学習サイクルの手法を参考に本学が独自に手を加えてプログラムを構成した。特に、同年代の現地の大学生との合同ミーティングとプログラム活動後の参加者全員でのふりかえり（事後研修会）は、先行研究^{1)~4),6)}が用いていない特色である。また、先行研究^{1)~4),6)}においては、アンケート調査から災害ボランティアの経験から感じたことや学んだことについては見出せているが、その後、それらをどのように生かしていくのかについてはほとんど調査がなされていない。これに関しては、本報告では体験学習サイクルの手法を意識して、参加学生に「目標設定」を行わせ、事後においてプログラムを通して得られた学びや気づきを「実社会へ応用する」ことを考えさせるアンケート調査を行った。この点は、本報告の独自性であると言えよう。

このような構成で本プログラムを行った結果、事前アンケートおよび事後アンケートの内容から、参加学生は本プログラムでの活動を単なる体験でとどまらせることなく、そこから多くの気づきを得て、さらにそれを自身の学びとして落とし込むことができたと推察された。また、実社会での次なる具体的な行動を起こすことが予想される記述も多く確認

された。

これらのことから、本プログラムの構成は参加学生に復興支援ボランティア活動を通じて学びを提供するのに有用なものであったと考えられる。

4. ま と め

参加学生の被災地でのボランティア体験を学びに転換するために、連携先である東北学院大学から提示されたプログラム内容に、体験学習サイクルの手法を参考に本学が独自に手を加えてプログラムを構成した。その結果、活動前の「目標設定」を含む事前研修会および「実社会へ応用」することを意識した事後のふりかえりを行うプログラムの構成は、参加学生に体験から学びを提供するのに有用なものであることが示唆された。ただし、その学びに関しては、プログラム中での体験、すなわち実際に目にする風景や被災者の姿、従事する活動内容、被災地で知り得た情報、交流する方々との会話内容やその方々からの言葉、などの影響を受けることが示唆された。

最後になりましたが、この度の東日本大震災復興支援プログラムにご協力くださったすべての皆様に、この場を借りて感謝申し上げます。誠にありがとうございました。そして、被災地と被災地に住む方々の一日も早い復興を心から願っています。

引 用 文 献

- 1) 阿部利江, 小崎浩信, 小坂 隆 (2014): 復興支援教育プログラムの開発 第一報——東日本大震災における学生ボランティアの学び——, 感性福祉研究所年報, Vol. 15, 389-400.
- 2) 林 直哉, 岩田英津子, 大塚大樹, 緒方志保, 高村静巴, 伝田有希, 深田 綾, 船橋英里佳, 三宅留夏, 山越 恵, 武藤香織 (2005): 中越地震復興支援ボランティア経験から看護学生が学んだこと, 信州医学雑誌, 53(6), 421-424.
- 3) 飯 考行, 李 永俊, 作道信介, 山口恵子, 平野 潔, 日比野愛子 (2012): 大学教育としての災害ボランティア: 「東日本大震災復興論」の開講, 21世紀教育フォーラム, 第7号, 11-27.
- 4) 門脇啓一, 吉田利弘, 伊藤芳郎 (2015): 支援実践部門活動報告 学習支援ボランティア活動等を通じた学生の育成, 宮城教育大学教育復興支援センター紀要, 第3巻, 23-33.
- 5) プロジェクトアドベンチャー・ジャパン (2013): クラスのちからを生かす——教室で実践するプロジェクトアドベンチャー——, みくに出版, 40-50.
- 6) 渡辺 浩, 杵山哲男 (2011): 東日本大震災復興支援における遠隔地の大学の災害ボランティア派遣の取り組み, 地域安全学会梗概集, No. 29, 87-90.